神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

My innovations I : Teaching English to young children (2)

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-11-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 横田, 玲子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/416

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

授業を創るⅠ「児童英語教育②」

横　田　玲　子

はじめに

前号では，「児童英語教育」を大きく分けて以下の４項目について述べた。

１.「児童英語教育」という科目

２．全学共通科目「児童英語」と外大生

３.「児童英語教育」の授業の核，理論的背景

４．シラバスと教材

4.1　居場所

4.2　自主教材の実践

本稿は上記では「４．シラバスと教材」の中の３つ目の項目である児童館実習についてまず述べる。それに続いて，今一度「児童英語教育」全体像に話をもどし，評価，総括，そして展望を述べる。

4.3　児童館実習

全14回の授業時間の他に履修者がグループで45分の指導計画を立て，準備し，実際に子どもたちを対象に「児童英語教育」を実践してくる課題として児童館実習を位置づけ，単位取得のための必須条件にしている。教職課程における介護等体験や教育実習とは異なり，教職課程を取ってなくても履修できる全学共通科目の授業における現場体験としての実習である。

子どもたちに英語を教える様子をビデオで見たり，自分が子どもになったつもりで教材に向かうことを経験する大学での授業のあと，実際に子どもに

英語を教えてくる課題であるが，毎年この実習報告レポートを読むとどれだけこの「本当の経験」が履修者にとって大きなインパクトを持っているかを痛感する。

「児童」という小学校学齢期の子どもたちが集まる場所である児童館を実習の場としているのは現実的な理由，すなわち履修者たちが自由に内容を計画し，それを実践することを許可してもらえるという理由からである。個人経営の児童のための英語塾や企業が主催している児童英語教室は街中にも住宅地にもたくさんあるだろう。それらを大学の授業の一環として見学することは可能かもしれないが，単に「見学」ではなく，履修者自身が「教える立場」を生に経験できる場所を筆者は探していた。2004年度に英語教育学専攻の大学院生を通じて春日台児童館を紹介され，実際にその児童館を訪ね，どのような活動ならどの程度可能か，ということを職員と話し合った上で，2005年度から実習が可能になった。

4.3.1　実習の概要

児童英語教育では履修者たちが教室内で自分の居場所を作り出すべく，いろいろな人とディスカッションをしたり，グループ活動で子どもになったつもりで様々な教材を実際に英語を使って行う学習と平行して，毎回，一定時間をとって児童館実習の準備をさせる。

実習場所は神戸市立の３つの児童館である。西区春日台児童館は，2005年度よりこの授業の履修者の実習を受け入れ，夏休みを除いて，６月下旬から12月にかけて，グループごとに訪問している。2008年度より春日台児童館の分館である西区樫野台学童保育コーナーが同様に実習を受け入れている。また2010年度には新たに中央区たちばな児童館も実習を受け入れ，７月から12月まで合計７回，７つのグループが実習を行った。そのほか過去にも幾つかの児童館から，ぜひ実習先として学生たちにきてほしいという申し出を受けたが，学生がアクセスしやすい児童館の場所，また児童館職員と筆者との連

携が出来，大学の授業の一環としての実習を理解していただける場所として現在は上記の３つの児童館に絞っている。

前期でこの授業は終了するが，児童館の受け入れは週一回であるので，すべてのグループが実習を終了するのは毎年秋か冬である。筆者は年度初めに児童館を訪問しその児童館のスケジュールを確認し，また前年度の反省事項や注意点を児童館職員からかなり詳細に伺う。またグループの訪問日程が決まった後も訪問する人数，教材に使いたいものの問い合わせ等，メールや電話で随時職員とは連絡を取り合う。この実習も年度を重ねることにより，児童館職員も履修者の未熟な面を積極的にフォローし，指導者としての注意点をどんどん伝えられるようになったと話されており，こちらも放課後に子どもたちが集まる児童館でどのような活動が子どもたちにとって英語との良い出会いになるのかを手探り状態から始めながらも，安全に楽しく遊びながら英語を使う低学年対象の活動としての計画が出来るようになって来ている。

児童館のスケジュールに合わせ英語活動が可能な日をいくつか提示し，各学生がどれかを選択しグループを構成する。必ず複数の人数で行くこと，実習前に簡単な指導案を作り，実習後にその場で実習記録を記入し，一週間以内にA4で２ページほどの実習報告レポートを書き提出することを単位認定の条件としている。

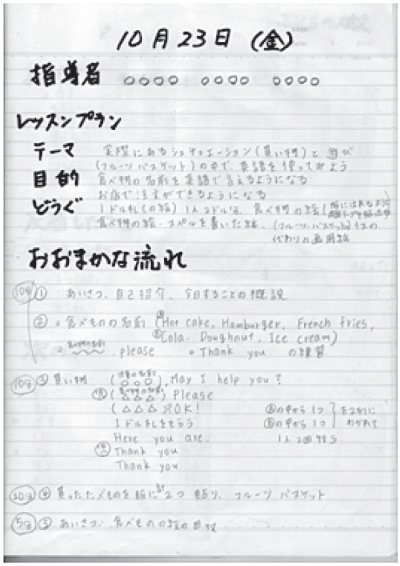
活動の内容はゲームや工作を使った英語遊びが中心である。前年度までどのような活動をしていたのかを実習記録から紹介し，実習の様子のビデオを見せ，具体的に参加者は６歳か７歳の児童が20人くらいであること，また小学校とは違う児童館という場所の特質を説明し，実習の計画を立てるよう指示する。最初の実習が始まる６月下旬までの間に履修者も幾つかの教材を自分で学習者として経験したり，教科書として用いている「英語のゲーム＆クラフト集」の中から幾つかをグループで実際に試してみたりして，教材に関しての具体的なイメージを作っていく。実習に行く日程とメンバーが６月中旬に決まるので，それ以降の授業のグループ活動は実習グループで行う。色

画用紙，のり，はさみなど自分たちの計画に必要な教材準備もグループの責任で行われる。色画用紙のように決して安価といえないものは，どのように裁断して使えば無駄がないかを考えて，必要な枚数を提示させるようにしている。

4.3.2　事前準備の「実習ノート」

現在児童館は３か所なので，それぞれの児童館用に３冊の実習ノートがあり，実習日以前に書き込む１ページと実習後その場で書き込む１ページがある。

実習日以前に書き込むのは，①指導者名，②レッスンプラン（テーマ，目的，準備物），③45分の流れの計画，の３点である。これらをグループで書くことにより，自分達が何をテーマにどのような活動をするのかをきちんと事前にまとめることができる。教職課程の教育実習の実習ノートのような細かいものではなく，あくまでもグループでまとめ，自分達のやることをしっ


10月23日（金）

指導者　○○○○　○○○○　○○○○

レッスンプラン

テーマ　金曜にあるショッピングセンター（買い物）と関が（フルーツバスケット）のので，英語を使ってみよう

目的　食べ物の名前を英語で言えるようになる

どうぐ　お店で，買えてもらえるようになる

1ドル札（の絵）1人ゴドルは，食べ物の絵（…）

おおまかな流れ

10分 ① あいさつ，自己紹介，今日やることの概説

② ・食べものの名前（Hot coke, Hamburger, French fries, Cola, Doughnut, Ice cream）

・…, please　・Thank you　の練習

10分 ③ 買い物（…）May I help you?

（△△△）Please

（△△△）OK!

1ドル札をもらう

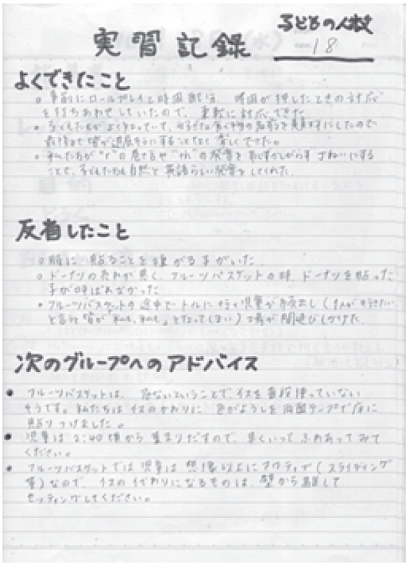
Here you are.

Thank you

Thank you

10分 ④ 買ったものを袋に入れる　…

5分 ⑤ あいさつ，食べものの名前の復習


こどもの人数 18

実習記録

よくできたこと

・事前にロールプレイと時間割りは，時間が押したときの対応を打ち合わせていたので，臨機に対応できた。

・食べたものがよくわかっていて，みんなが食べ物の名前を英語でいえたので，自信をもって楽しんでいる様子に驚いてました。

・私たちが"r"の発音を"rh"の発音と聞こえないのに，子どもたちは自然と英語らしい発音をしていた。

反省したこと

・時間に縛られることを嫌がるまがいた

・ドーナツの売れが悪く，フルーツバスケットの時，ドーナツを買った子が時間がなかった

・フルーツバスケットの途中でトルコ語で，児童が発言し（…）と言わ"…"…ことなって（…）子供が間違えてしまった。

次のグループへのアドバイス

・フルーツバスケットは，…ないということで，イスを番号使っていないようです。私たちはイスのまわりに…ようにして…に戻りました。

・児童は…から集まりだすので，早くいってふれあってみてください。

・フルーツバスケットでは児童は…以上にアクティブ（スイミング等）なので，イスのまわりになるものは壁から離して セッティングしてください。

かり頭に入れるための計画表のようなものである。

また実習直後，後片付けをした後その場で書き込む実習記録のページには，①よくできたこと，②反省したこと，③次のグループへのアドバイス，の３点をグループで話し合って書き込む。このページを書くことで，その日の活動をグループで振り返るとともに，後に提出すべき個人のレポートに書く内容を見つけ出すことも出来る。また実際に自分達がやってみて，次に実習に来る予定のグループへの伝言でもあるアドバイスの項目は，時間配分のどこに気をつけたらよいとか，子どもたちは実際はどの程度の英語を知っているとか，次に行くグループにはとても役に立つ情報が書き込まれており，実習ノートを見れば何時どのグループがどのようなことをやり，どのような反省点が出たかを共有することができるようになっている。

4.3.3　事後の「実習報告レポート」

「実習報告レポート」は同じものを２通提出とし，１通は評価のためのものであり，もう１通は年度の最後のレポートが提出されたあと冊子にして児童館に提出する。レポートを読むと，計画の中には想像もつかなかったことが様々起きている様子が書かれ，その時の迷い，また計画の甘さ，教えることにはどれだけのエネルギーがいるか等の発見が述べられている。たとえばどれだけ計画をしていても実際の子どもたちは予想をはるかに超えて活動的だったこと，新しい言葉としての英語に対しても臆することなく発していたこと，ゲームがヒートアップして収集がつかなくなったこと，途中でいじけて輪の外に出てしまう子をどうしていいかわからなかったこと，そして，活動が計画通りには行かず自分たちの甘さを十分認識したといいながらもそれはやってみなければわからなかったということなどである。レポートの多くはその経験ができたことの充足感と児童館への謝辞でまとめられている。

春日台児童館では，毎回の活動を写真で記録し，その時の学生のコメントを添えて，活動の様子が館内に掲示され，児童館を訪れる保護者達に読まれ

ている。学生たちの活躍によって，この実習について児童館職員や保護者の理解や信頼を得ることが出来，翌年の実習の継続を望まれて続いてきている。また今年から実習を受け入れているたちばな児童館では，学生たちの実習のあと，その様子を毎回ファックスで知らせてくれる。学生たちがどのように頑張っていたかという評価のみならず，次回への連絡事項も含め，細かいアドバイス，たとえば，低学年の児童にはどのようなマーカーだともっと使いやすいかとか，歌の歌詞をどのように提示したらさらに見やすいか等，指導者の目でのアドバイスで，次に行くグループへの具体的なアドバイスにもなっている。

児童館では，６歳や７歳の子どもと言えども，一人の人間としての自己を持ち，プライドを持ち，エネルギーを発散させながら真正面から向かってくる。そんな子どもたちの姿に触れながら，英語の活動を通して，子どもの成長のためになる英語教育を考える機会になっていると同時に，履修者自身の自己を見つめる機会にもなっていると思う。実際に教える経験から生まれる自己内省，児童英語の難しさ，指導者としての責任，安全に配慮した計画と準備，時間を守ること，それらすべて含めて，この児童館実習はこの授業の締めくくりにふさわしいと思う。以下は履修者たちの実習レポートの抜粋である。

●実習を終えて最初に出てきた言葉は「疲れた」の一言でした。それは自分の予想をはるかに超えた小学生のパワーと，英語でのコミュニケーションの難しさから出た言葉だと思います。しかし疲れと同時に自分の求めていた以上の達成感を得ることができました。子どもたちは私たちが持ってない活気に満ち溢れたパワーがあり，私たちが思っている以上にしっかりした意思を持っているものなのだということを感じ，また相手が小学生であろうが，こちらも本気で活動に取り組まなければコミュニケーションを取るどころか，こちらに注意を引き付けることすらできないということを改

めて感じさせられました。小学生相手に英語でコミュニケーションができたというのはとても貴重な体験であると同時に，自分が英語で相手に伝えたいことを伝えられたんだという達成感を得ることができてとても感謝し満足しています。児童英語を通して自分が英語に対し，一歩近づけたような気がします。

● ４月に20歳になってから自分はもう大人なんだっていう自覚がだんだんと芽生えて，何かにつけて命の大切さについて深く考える機会が多くなった。そして今回の児童館での英語活動実習の体験を通して，自分なりの結論に達することができたように思う。それはいのちは語るもんじゃないんだなということ。百聞は一見にしかずじゃないけど，『いのちは大切だ』なんて正論を語るより，一度子どもに触れるほうがいのちの大切さをずっとずっと理解できる。あのずっしりとした重みとか。あぁこれがぬくもりなのかってわかるあの温度とか。まっすぐ向いてくるあのパワーとか。甘酸っぱいようなあの匂いとか。いのちのエネルギーというか，生命力というべきか，言葉じゃ説明つかないものに触れられた気がする。

私も世間的にいったらまだまだ若い方なのだろうけど，あの子どもたちの元気さを目の当たりにしたら，若いっていいなぁと思わずにはいられなかった。うまく言えないけど，英語という異文化に対して抵抗なく向き合って溶け込

んでいく姿を見て，私たちがどうやって興味を引こうとか悩んだのってなんだったんだろうと思ってしまうくらいだった。私たちは魚釣りゲームをした。子どもたちが楽しんでくれていることが見ていて十分に伝わってきた。嘘にならない状況で色や数の勉強もできたし，とても効果的なやり方だったと思う。だけどその活動外での方がハッとさせられることが多かった。正直言ってしまうと，児童館から帰ってきた直後は去年の児童館での英語活動のビデオを見た時以上に『本当にこの子どもたちにとって英語教育は必要なんだろうか』という気持ちがわいてきた。こんなにも一生懸命に生きていて，こんなにも楽しそうで，こんなにも輝いているこの子どもたちに英語教育を通して私たちが一体何ができるというんだろう。今はまだうまくまとめられないけど，今回の体験で私の中の正論とされてきたものが実感をともなって確固たるものになったのを感じる。今回の経験はターニングポイントになった。

●僕自身の感想としては，まず，たくさんの人を相手に教えるということは，すごく頭も使うし体力も必要だなと感じました。昔，学校の先生に反抗しまくっていた自分としては苦労かけたなぁという申し訳ない気持ちでいっぱいです。人に何かを教えるということは非常にエネルギーのいる行動だと思いました。新しい知識を身につけさせるには，身につける方も大変でしょうが，身につけさせる方も生半可な気持ちで臨んでいてはいけないと思いました。教えるために綿密に立てた計画はもしかしたら教え始めて５分もたたないうちに計画をぶち壊さなくてはならない状態に直面するかもしれません。特に小さな子たちはそういう破壊力は抜群にある

と思います。しかしそれでも計画を修正しながら「教える」という行動に挑まねばならないのです。無計画な教える人間が無秩序な教え子を教えていてもそれは悲劇への階段を上っているだけだと思いました。最後に，教職に興味のない僕が教育の最先端である児童英語教育の世界に飛び込んだ半年間でしたが，今振り返ってみると一番真剣に打ち込んでいる授業になっていました。僕が授業で一番前に座ったのは人生の全学生生活を通して生まれて初めてです。「一言一句聞き逃すまい」と思って臨めた授業でした。

５．評　価

各履修者への評価は自己評価を中心として行う。出席して活動に参加することが大切な科目であることをシラバスに明記し，初回の授業において，時間を守ること，健康管理も含めての自律ある態度で履修を決めてほしい旨を説明し，前期の最後には自分の歩みを自分で評価することを伝える。最終授業においては，何が学びであったのかを記述してもらうと共に，時間を守れたか，他者とのコミュニケーションに気を配ったか，授業の活動に誠意を持って参加していたか，教育を学ぶ意識が４月に比べ育ったかを５段階で自己評価をし，出席回数を含めての総合評価も５段階の自己評価で行う。毎回の授業の最後に求めるリフレクションコメント，また児童館実習のレポートを含めて筆者の総合評価とするが，参加型授業において，一人で黙って座っていることが許されないので，最後まで出席した履修者の多くは３カ月半の自分の努力を認めるし，指導者としてもその努力による評価に反論する題材がない限りは履修者の自己評価を尊重して評価を決定する。また，前期の授業であるにも関わらず，実習が後期になっている場合は前期には仮の評価をつけ，レポートが提出され最終評価が終わったところで評価が決定することを学生に伝えている。

６．総　括

全14回の「児童英語教育」においては英語を「使う」手段として位置付けてきた。前号で述べた幾つかの筆者のオリジナル教材のどの活動も英語で聞き，英語で他者とコミュニケーションをとり，人との関係の中で英語を使っていくことを目指した。教室の中で使える英語，それが実際の行動を伴って，今やっていることの中での人との関わりで英語を使う経験をこれからも大切にしていきたい。デューイ（2004）が言うように，現時においての有益な学びや経験はきっとその再構築をへて将来のためにもなるだろう。

何が学びだったかを授業の最後の10分間で話し合ったり，それを一言リフレクションとして書かせたりする中で多くの履修者が，英語を使う場合に間違えることを恐れているのがわかる。しかし同時に彼らはそれでも英語は使っていかない限りは上達しないこともわかっている。この授業で使う英語のほとんどは単純な表現であるが，単純ゆえに英語で生活しようとすれば日常使用する表現が多い。何かを持ってきてもらう表現，相談する場合に使う表現，工作に必要な表現等，逆に履修者たちにとってはこれまでの英語学習において使ったことがない表現が多いのも事実である。筆者自身も英語でしゃべる時には失敗を重ね，それでもまたしゃべろうとすることで自分で間違いを修正していくことを説明しながら，履修者たちを励まし，英語での活動を続けている。完璧な英文でなくては教えられないと思っているうちに目の前の子どもたちはどんどん成長していってしまうこと，必要な表現を準備しても会話の中ではそれでは足りなくなるので，自分の知っている単語を使って話を続けることの経験を積む大切さを，活動を通して履修者に理解してもらいたいと考えている。

大学の授業は週一回であり，またいろいろな専攻の履修生が集まる科目であるが，だからこそ，全14回での限界はあるにせよ，ちがう人間がこの授業で時間を共有し，お互いに関わり合いながら学ぶということをこれからも授業の軸に考えて行きたい。指導者としての筆者自身も毎年どのような顔ぶれ

で授業が始まるのか，どの程度までを指導してどこからを履修者に任せるか，前年度はここまではできたが，今回のメンバーではどうだろうかといつも心に一抹の不安を抱えながら，授業を創る経験を続けている。毎回の講義メモと履修者らのリフレクションが，授業者の気付かぬ効果や盲点を示してくれる。履修者のリフレクションによって筆者自身が授業を深く振り返ることが可能になり，次の授業への足がかりを見つける。学習の振り返りによって，できないことを嘆きつつも自分の未熟さを自覚して前に進もうとする態度を育てられるようになってほしいのは履修者への願いであると同時に筆者自身の自己内省を促し指導者としてさらに先に進んで行きたいという希望にもつながる。履修者のリフレクションには必ず筆者のコメントを毎週書き加え，履修者とのコミュニケーションを図りながら，「児童英語教育」を経験的に理解する場としての授業を目指したい。失敗が許されている環境，他者と共に学びを続けて行く「教育」としての視点から逸れずに，そして「現場」で学ぶ授業創りをさらに深めていきたい。以下は児童英語最終授業時の総括としての履修者のリフレクションの抜粋である。

- 一番印象深いことは，「児童英語」は「中学校英語」の先取りではないということでした。4月当初，私は「児童英語」は授業や受験の手助けにすぎないと思っていましたが，それは全く違いました。「児童英語」とは「本物」の英語に触れること，簡単でも，短い単語であってもその場で真実の英語であることが大切だと思いました。
- 最初は単純に子どもが好きで英語を教えたいな，という少し軽い気持ちでこの授業を取りました。しかし先生の話を聞いたり，実際に子どもを教える activities を自分達でしているうちに，児童英語教育の奥深さ，そして子どもにこれらを教える大変さをすごく感じ取ることができ考えさせられました。単に子どもに英語で話し，授業を教えるのではなく，「忘れたくても忘れられない授業」をするためにはきちんと計画して，授業中に使う

道具を用意して，子どもたちが楽しく，そしてその楽しい時間の中で自然に英語を使い学ぶ楽しさを教えてあげるよう私たち自身がキチンと考えないといけないとこの授業が教えてくれました。

- 児童英語とは単に児童に単語やちょこっとした会話を教えるだけだと思っていた。しかし，これまでの授業を通して児童英語で最も大切なことは，いかに英語で自分を表現できるようになりたいと思わせるかだと思った。中学でいきなり“勉強”としての英語に触れるより以前に“手段”としての英語に触れることが児童英語の目的だと思うし，むしろそれは一番大切なんだと感じた。
- 初めのころは「どうやったら英語が話せるようになるか，英語が身に着くのか？」と英語を主体にしてどんな活動ができるかを考えていた。学習者が英語を嫌いにならないように楽しい活動（ゲーム）をやろう！とそのことばかり考えていた。でも英語を使うってこういうことじゃないんだって途中で考えが変わった。「これがやりたい！」って時にじゃあそこに英語を手段として取り入れようと思った。一番大切なことは，英語を教えることじゃなくって，私がこれを伝えたい，これを子どもに経験してほしいと考え，その過程で英語を取り入れてみよう！ということだと思うようになった。
- ４月当初は児童英語ってどういうものだかあまりわからなくて，授業で教えてもらえばいいやと思っていました。でもこの授業に出てその答えは教えてもらうのをただ受け身で聞くのではなく，自分で行動してつかみ取っていかなければいけないんだと思いました。
- 履修前は児童英語は「絵やゲームを使って子どもたちに生きた英語を教えるもの」と思っていたが，ゲーム一つを考えてみても，「それが何を教えることにつながるのか」考える必要があることを授業で学んだ。また子ども相手だからこそ，英語以外にも生活上で大切なルールを教えたり，避難方法を知っておく必要があると初めて実感した。教えるべきことは教材が

なくとも日常に溢れていてそれをどう有効利用するかは自分次第なのだと思うように変わった。

7．おわりに　―「児童英語教育」から「小学校英語教育」へ―

小学校の外国語活動必修化完全実施が2011年に施行される。本学の「児童英語教育」は経験主義を貫いた低学年対象の英語教育を中心としているが，義務教育内での英語教育を見据えてこの「児童英語教育」の講座も，小学校の外国語活動を理解するための教養として意味があるように，折りにふれ自主教材のほかに小学校ではどの学年でどのようなことが成されているかを資料やビデオ等で紹介してきた。児童館ではなく，小学校の現場で指導者として立つには教員免許が必須であるが，実際の小学校現場では英語が堪能な地域の人材が担任の教師の支援をしている場合もあり，本学でもスクール・サポーターやイングリッシュ・サポーターとして小学校での教育支援に関わる学生が増えてきた。そこで2009年度より，「児童英語教育」を履修した学生が履修できる小学校英語教育に特化した講座を総合文化コース，および語文コースの科目として開設した。実際に小学校で使われている教材についての理解を深めるとともに，それがどのように小学校で実践されているかを学ぶ講座である。講座の時間内に小学校に出向き，英語活動の時間に教室に入って実際の小学校外国語活動を参観したり，また英語ができる人材として担任の先生の指示のもと，外国人役になって発音を子どもたちの前で聞かせたり，コミュニケーションの相手になったり，「児童英語教育」を履修した上で，さらに小学校英語教育を学びたい学生にとっては学校教育現場に入りながらの学習が続けられるようになった。

2009年度には，神の谷小学校，長田小学校，横尾小学校，松尾小学校，太山寺小学校，若草小学校の授業支援に行った。この活動は筆者による担任教師への授業支援も兼ねることができ，履修者にとっては現場での学びの場であった。講座の時間内に大学との往復が可能な小学校の数は限られたが，複

数の小学校を訪問することによって，履修者は地域と学校のつながりや授業の様々な工夫を学ぶことが出来た。2010年度は大学から徒歩圏内にある東町小学校に絞って，継続的に授業支援に行く形を取っている。一つの学校に絞ったことにより，担任教師や児童と一回ではない関わりが可能になり，また外国語活動以外の教育活動の描画会や音楽会などの参観も可能になった。外国語活動の実践の場を学ぶと共に，それが行われている小学校教育の他の場面を参観出来ることはとても重要だと思う。

「児童英語教育」での学び，「児童館実習」での経験があるからこそ，小学校に行っても「教える」立場を理解しつつ，子どもたちや小学校の先生たちへの積極的な支援が可能になっている。公教育の現場を内側から教師や児童と共に時間を過ごすことは，履修者にとって，現在の「学校教育」に参加し，自分がどれだけ役に立つかを実感出来る講座ではないかと思う。

小学校での英語教育が「外国語活動」として実質的に必修化するとともに，今後はさらに「児童英語教育」また「小学校外国語活動」に関する期待や課題は増え続けると思う。履修者が単に理論だけでそれらを理解するのではなく，履修者同士のコミュニケーションの中で考えを深められるとともに，児童館や小学校での教育の「現場」を知り，「現場」で学べる講座をこれからも続けたい。

参考文献

アルクキッズ英語編集部　(2007)『英語のゲーム＆クラフト集』　アルク出版
ジョン・デューイ　市川尚久訳　(2004)『経験と教育』講談社学術文庫